

ハウスミニトマト栽培における多収化モデル技術の導入効果

【1 成果の概要】

- (1) 大玉トマトで示した多収化モデル技術（H28年度成果）をミニトマトに導入することにより（表1）、従来の雨よけ栽培に比べて、1作長期どり栽培で概ね2倍以上、年間2作どり栽培で3倍以上の可販収量を得ることができます（図1）。
- (2) 「サンチェリーピュアプラス」を利用し、2作目を1作目の栽培中に定植するインタープランティングを用いた年間2作栽培にすることで、可販収量は最も高くなります（図1、図2）。
- (3) 3つの栽培体系のうち、インタープランティングを用いた年間2作栽培の所得が最も高くなります（表2）。

表1 多収化モデル導入技術（2017年）

環境要因	導入技術	(参考) 雨よけ栽培
光	栽植密度 4.9 株/m ² 誘引高 2m	2.45 株/m ² 誘引高 1.8m
CO ₂	ゼロ濃度差+ダクト局所施用	無し
湿度	多段階飽差制御	無し
温度	6時間帯変温管理	2変温管理
隔離床	ロックウール	土耕栽培
養液管理	濃度管理	
作期拡大	年間2作栽培(インタープランティング)、1作長期どり栽培	

表2 多収化モデルの経営試算（2017年100坪×3棟）

費目	多収化		雨よけ栽培
	年間2作	1作長期どり	
可販収量 (kg/10)	24,025	17,589	6,000
単価 (円/kg)	628	615	613
A 販売額 (千円)	15,095	10,809	3,678
B 支出計 (千円)	8,943	6,937	1,751
C 固定費 (千円)	1,928	1,928	904
D 所得 (A-B-C) (千円)	4,224	1,943	1,023

品種：サンチェリーピュアプラス
単価は東京卸売市場統計情報（H24-28年5ヵ年平均）を基に計算
労働費は含めていない

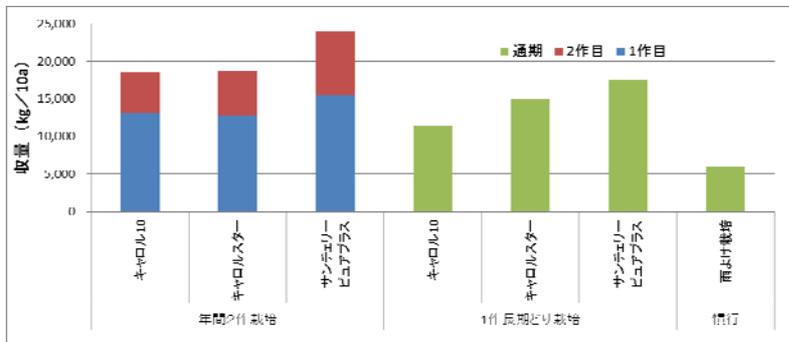


図1 果実収量の作型及び品種間差異（2017年）

耕種概要

(年1作長期どり) 播種 1/16、定植 3/2
(年間2作1作目) 播種 1/16、定植 3/2
(年間2作2作目) 播種 6/27、定植 7/29
畝間：1.5m、つる下ろしによる斜め誘引

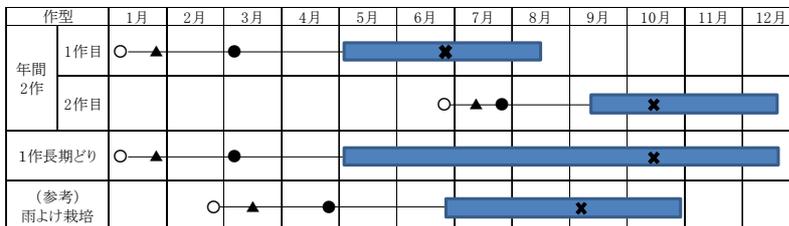


図2 作型

○：播種 ▲：鉢上げ ●：定植
■：収穫 ×：摘心
2作目は未開花苗を定植

【2 留意事項】

- (1) 本試験では、各花房とも果数制限は行っておりません。
- (2) 環境計測及び制御はユビキタス環境制御システム（通称：UECS）を導入して得た結果です。
- (3) インタープランティングによる年間2作栽培では、2作目が1作目と重複する期間の農薬使用は両作の使用実績となります。

【3 適用地帯または対象者】 県内全域の指導機関、ミニトマト生産者

担当研究室 技術部 野菜花き研究室

〒024-0003 北上市成田 20-1 TEL. 0197-68-4420 FAX. 0197-71-1083